

2015年11月1日川越教会

苦しみを喜びに

【聖書】エレミヤ書24章1～7節

主がわたしに示された。見よ、主の神殿の前に、いちじくを盛った二つの籠が置いてあった。それは、バビロンの王ネブカドレツアルが、ユダの王、ヨヤキムの子エコニヤ、ユダの高官たち、それに工匠や鍛冶をエルサレムから捕囚としてバビロンに連れて行った後のことであった。一つの籠には、初なりのいちじくのような、非常に良いいちじくがあり、もう一つの籠には、非常に悪くて食べられないいちじくが入っていた。主はわたしに言われた。「エレミヤよ、何が見えるか。」わたしは言った。「いちじくです。良い方のいちじくは非常に良いのですが、悪い方は非常に悪くて食べられません。」

そのとき、主の言葉がわたしに臨んだ。「イスラエルの神、主はこう言われる。このところからカルデア人の国へ送ったユダの捕囚の民を、わたしはこの良いいちじくのように見なして、恵みを与えよう。彼らに目を留めて恵みを与え、この地に連れ戻す。彼らを建てて、倒さず、植えて、抜くことはない。そしてわたしは、わたしが主であることを知る心を彼らに与える。彼らはわたしの民となり、わたしは彼らの神となる。彼らは真心をもってわたしのもとへ帰って来る。」

【序】宗教改革記念日

昨日の10月31日は宗教改革記念日でした。1517年のこの日カトリック教会修道士マルチン・ルターが、ドイツのヴィッテンヴェルク城教会の扉に95ヶ条の論題を貼って討論を呼びかけ、それがきっかけとなってドイツの教会の間に、宗教改革の新しい歴史が始まり、プロテスタント教会が誕生したのです。そこで今日のメッセージは、この宗教改革について学ぶことから始めます。

【1】マルチン・ルターの信仰

ルターは1483年11月10日生まれですから、この時は34才になる直前でした。父は信仰深い炭鉱夫でした。大学で法律を学びましたが、修道士になる召命を受け、22才で修道院に入り、聖くなろうと断食・祈祷して、懸命に苦闘しました。そして遂に「善い業によって救われるのではなく、キリストを救い主として信じることによって、義と認められて救いにあずかる」(ロマ 3:21 以下)という新約聖書の信仰義認の信仰を体得したのです。

ところがローマ法王庁の許可を受けて免罪符が売り出され、彼の教会の信者たちも買っていることを知り、彼は立ち上がったのです。免罪符とは、誰でも生きている時に犯した罪に応じて、死んでから煉獄で或る期間を過さなければならないけれども、免罪符を買って教会に寄与すれば、死者を煉獄から早く救い出せるというものです。ルターはどんなに優れた聖者であっても、特別な功德を持っている者ではない。もし法王が持っているのならば、免罪符など売らずに自分の功德を用いて煉獄をカラにすべきだと主張したのです。

ルターは「聖書だけが正しい」という信仰がはっきりしていくうちに、ローマ法王を中心とするカトリック教会の誤りを一つまた一つと指摘し始めました。

例えば今日私たちも守ろうとしている「主の晩餐」についてです。

キリストは「取って食べなさい。これはわたしの体である。」とおっしゃいました。カトリックのミサで、聖職者が式文を朗読するとパンがキリストの体に変化するのではありません。またキリストはおっしゃいました。「皆、この杯から飲みなさい。これは罪が赦されるように、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である」。だから全会衆が杯をいただくべきで聖職者だけが頂くのではないと、教会が守って来たミサを否定しました(マタイ 26:26~28 他)。

またカトリック教会は七つの礼典を定めていますが、聖書にはバプテスマと主の晩餐の礼典しか記されていません。礼拝はラテン語で行うべしと聖書のどこに書いてあるでしょうか、ドイツ語でもよいはずですが。また法王の各教会に対する裁可権をも批判しました。そのため法王はルターを陪餐禁止(破門)にしましたが、彼はその破門書をかがり火で焼き捨ててしまいました。

法王が神聖ローマ帝国皇帝にルターを裁判にかけて有罪判決を下すように求めたので、ルターは 1521 年4月、ヴォルムスの国会に召し出されました。彼は「この町の屋根瓦ほどの悪魔が待ちかまえていようとも私は行く」と決意して、自分で作った讚美歌 538「神はわがやぐら」を歌いつつ、出頭したのです。

彼は自分の著作書を積み上げられた机の前に立たされて、内容を撤回するよう問い詰められましたが、「聖書から正当な理由を示されない限り、撤回しません。私の良心は聖書にとらえられており、私は聖書に逆らうことは出来ません。神よ、助けたまえ。アーメン」と答えました。

翌日、皇帝は「1000 年以上にわたり信奉されてきた教会の信仰に逆らっている。今回は約束した通りに帰宅させるが、その後官憲に引き渡すべし」と判決を下しましたが、ルターはその前の晩に町を出立していました。そして帰る途中で彼の支持者フリードリッヒ侯によってヴァルトブルク城にかくまわれました。ルターはこの幽閉期間中に聖書のドイツ語訳と取組み、旧新約聖書の翻訳を完成させ、印刷機によって全ドイツに配付され、ドイツ語による礼拝が行われるようになったのです。

ルターは新しい教会を起こそうとは考えていませんでした。しかし指導者たちが動こうとせず、新しい秩序を求める者達の行動が激しくなってきたので、新しい教会建設に動かざるを得なくなりました。そこで友好的な領主たちの助けのもとに、ミサや修道院の廃止、礼拝の簡素化、ドイツ語の礼拝、聖職者、修道士、修道女の結婚等が行われるようになり、国会の命令に抗議する改革者たちに対するあだ名「プロテスタント」という言葉も生まれました。

当時の風刺絵によりますと、修道士が説教壇に立ち、聖書も持たずに手を広げて語り、会衆はロザリオをまさぐっています。一方プロテスタント教会では聖書を前にして語る牧師の説教を、自分の聖書を開いて聞いている会衆が画かれています。今日の私たちの礼拝は如何でしょうか。

[2]悪いいちじく

さて今日の聖書、エレミヤ書 24 章をご覧ください。エレミヤは二つの籠を示されています。その当時のユダ王国は、国王エコンヤ、別名ヨヤキンが 18 才で王位につきましたが、わずか三ヶ月後にバビロン軍のエルサレム攻撃で捕えられ、その家族・高官たちと共に**第一次捕囚**としてバビロンに連れて行かれ、叔父の**ゼデキヤ**が 21 才で王に立てられていました。

これはダビデ王より 400 年余続いたイスラエル王国が、**存亡の危機**に直面していたことを意味します。このままでは既に 120 数年前に滅びてしまった北王国と同じになります。ゼデキヤ王以下全員が、どうしたらこの危機を乗り越えて**国家再興**を計るべきか、全員一丸となって真剣に取り組まなければなりません。主なる神の御心を真剣に聞き、悔い改めて、御心に聞き従って**新しい歩み**を踏み出さなければならなかったはずです。

ところが神はエレミヤに、非常に良いいちじくを盛った籠と、非情に悪くて食べられないいちじくを盛った籠とをお示しになり、非常に良いいちじくの籠が、**バビロンに連れて行かれた人々**であり、非常に悪いいちじくの籠が、捕囚を免れて**エルサレムに残っている人々**だと言われたのでした。これは一体どのような御心を示す預言なのでしょう。

恐らく**ゼデキヤ王**以下の人たちは、自分たちが**神に守られている**から残されたのであり、捕囚となった**ヨヤキン王**たちは、**神から見放された**からだを受けとっていたのではないのでしょうか。だから良いいちじくの籠が自分たちであり、捕囚の民**ヨヤキン王**たちは、悪いいちじくの籠だと受け取るでしょう。

ところが神は、**そのような心こそ非常に悪くて食べられないいちじく**ののだと、エレミヤを通して示されたのです。神が切に求めて居られることは、**悔い改め**なのです。捕囚という深刻な出来事を、神の御心に聞き従わず、罪に罪を重ねてきたことに対する**神の厳しい裁き**と受けとめて、深く悔い改めることを、神は呼びかけて居られるのです。

しかし歴代誌下 36 章 11 節以下をお読み下さい。「**ゼデキヤ王**は自分の神、主の目に**悪とされる**ことを行い、主の言葉を告げる預言者エレミヤの前にへりくだらなかつた」「彼はまたバビロン王に反逆し、強情になってイスラエルの神に立ち帰らなかつた」「**祭司長たち**もすべての民と共に、あらゆる忌むべき行いに倣って**罪に罪を重ね**、エルサレムの神殿を汚した」と記されています。

こうして**ゼデキヤ王**は神の裁きを受け、バビロン軍によってエルサレムの都を神殿と共に破壊され、自分の目の前で王子たちを殺され、その後で**両眼をつぶされ**、青銅の足枷をはめられて**バビロンに連れて行かれ**、そこで死にました。目をつぶされる直前に見せつけられたのが、息子たちの無残な死刑だったのです。その光景は、死ぬまで強烈に彼の脳裏に刻まれたことでしょう。どうして彼は神の言葉に聞き従って、**悔い改めなかつた**のでしょうか。

[結] 良いいちじく

一方、先に捕囚となったヨヤキン王のその後です。列王記下 25 章 27 節以下をお読み下さい。彼はバビロンで獄中生活を 37 年送りましたが、バビロン王メロダクの即位に当たって恩赦に浴し、釈放されたばかりか、他の王たちよりも最も高い位を与えられ、毎日王と一緒に食事を共にして、生涯を終えたのでした。これはまたどうしたことでしょうか？

私はこのように想像します。ヨヤキンは 37 年間の獄中生活で、預言者の言葉に耳を傾けるようになり、捕囚を招いた自分の罪深さを深く深く悔い改めて、謙遜な人柄に変えられていった。そしてそれが周囲の人々に認められ、王の耳にも達したのでしょうか。王は 55 才になったヨヤキンを自分の人生の先輩として、彼から学ぼうと思ひ、毎日食事を共にしたのではないのでしょうか。その点でバビロン王メロダクも優れた王だと思います。

ヨヤキンは、18 才になるまでエルサレムで育ちましたから、恐らくエレミヤたち預言者の言葉も聞いたはずですが。しかしバビロンの獄中に身を置くに至って、初めて捕囚仲間の祭司たちから神の言葉を真剣に聞くようになったのでしょうか。神は、悔い改める者に恵みを豊かにお与えになりました。ヨヤキンだけではありません。ゼデキヤと共に捕囚にされた人達をも 70 年後にはエルサレムに連れ戻して、新しい歩みをさせて下さいました。

詩編の言葉が浮かんできます。「卑しめられたことはわたしのためによいことでした。わたしはあなたの掟を学ぶようになりまし」(詩編 119:71)。口語訳では「苦しみにあったことは、わたしに良い事です。これによってわたしはあなたのおきてを学ぶことができました」。共同訳は、「苦しみにあった」を「卑しめられた」と訳し変えています。そうです。バビロンでの捕囚生活は、単なる苦難ではなく、屈辱的な苦難です。どんなに苦しかったことでしょうか。

苦しみ、卑しめられることは辛いことです。でも神は必ず恵みを与えてくださるのです。苦しみを喜びに変えてくださるのです。そのために神は悔い改めを求められます。しかし恵みをいただくのにヨヤキンは 37 年、ユダヤの民は 70 年もかかりました。私たちの罪深さが、それほど大きいことを、よくよく自覚して、常に神の御心に聞き従う信仰を養って参りましょう。良いいちじくを目指して、信仰の歩みを進めて参りましょう。

祈ります: 神さま、今日も共に聖書を学びつつ、礼拝を守れていることを感謝します。ルターのように、聖書のみを信仰の規範として、生きる者にしてください。あなたは、罪を悔い改めることを常に求めておられます。罪を気付かせて下さい。苦しむ時、卑しめられる時に、私の罪を贖って下さる十字架のイエスさまを仰いで、御霊の守り導きを祈り求める者にして下さい。この祈りを主イエス・キリストの御名によって祈ります。 アーメン